

増野正兵衛：おさづけを頂くまで ①

天理大学人間学部講師
深谷 耕治 Koji Fukaya

まず明治20年の「おさしづ」の主なテーマを確認したい。「おさしづ」の最初の主題は教祖の身上の切迫と現身を隠されるという事情、そして飯降伊蔵の本席定めであった。現行の『おさしづ改修版』は、教祖が現身を隠された日のおよそ1カ月前、明治20年1月4日(陰暦12月11日)の「おさしづ」から始まる。そのため最初の1カ月間の「おさしづ」は、教祖の身上の切迫という文脈の中にある。

そして、教祖が現身を隠されてからおよそ1カ月後の明治20年3月25日(陰暦3月1日)、飯降伊蔵が本席に定まる。3月4日(陰暦2月10日)の「おさしづ」が本席定めに関する最初のお言葉と見られるので、それから3月25日までは本席定めという文脈にあるといえよう。

- ・明治20年1月4日(陰暦12月11日)：現行本の最初の「おさしづ」。
 - ・明治20年2月18日(陰暦正月26日)：教祖が現身を隠される。
 - ・明治20年3月4日(陰暦2月10日)：本席定めについて最初の「おさしづ」。
 - ・明治20年3月25日(陰暦3月1日)：飯降伊蔵が本席に定まる。
- さて、こうした流れの中で増野正兵衛の名前は、すでに明治20年1月10日(陰暦12月17日)の「おさしづ」本文の後の補足説明に見られる。正兵衛は、明治20年の頃には信仰者の中で主要な人物の一人となっており、教祖の身上が切迫するという事情に対して主だった人たちと種々相談を重ねていた。およそ3年前の明治17年の入信なので、早くから熱心に信仰していたことが伺える。教祖が現身を隠された当日のおつとめでは、梅谷四郎兵衛、梶本松治郎とともに家事取締の任に当たっていた。

教祖が現身を隠されてからおよそ2週間後の3月4日(陰暦2月16日)に本席定めに関する最初の「おさしづ」があった。後々の本席定めのプロセスでは飯降伊蔵の身に異状が見られるようになるが、まず、このとき「何を聞いても見ても、一寸も心に掛けるやない。皆神の働き」というお言葉の後、伊蔵は「暫く制限過ぎて大声にて、ワツと二声あげ」たようである。

そして、同日、正兵衛も「胸の下障り」の身上について「おさしづ」を伺っている。「めんへ国々いかなる処締めり急ぐ」というお言葉は国々所々の治まりを示唆されているように思われるが、実際、正兵衛は6日後の3月10日(陰暦2月16日)に郷里(神戸)に戻ることにしている。帰郷に際して伺った「おさしづ」では「どうこう案じ心誘われんよう」とあり、たとえ先々見通しの立たないことでも案じることのないよう諭されている。

正兵衛はそれから割と早くおぢばに帰ってきたのであろう、およそ2週間後の明治20年3月27日(陰暦3月3日)にすでに「おさしづ」を伺っている。飯降伊蔵の本席定めは3月25日(陰暦3月1日)だったので、その2日後のことであった。そして、正兵衛はそれから「おさしづ」を数回伺っており、およそ1カ月半後の明治20年5月14日におさづけの理を戴いている。こうした流れを鑑みると、正兵衛に対する3月27日からの一連の「おさしづ」は、おさづけの理を渡すという文脈の中で捉えられるものと考えられる。

以下、3月27日から5月14日までの一連の「おさしづ」の割書を確認し、順次お言葉の内容についてみていきたい。

- ・明治20年3月27日(陰暦3月3日)午後4時「増野正兵衛 身の障り伺」
- ・3月27・28(陰暦3月3・4日)頃「増野正兵衛身上障りに付伺」
- ・4月6日(陰暦3月13日)「増野いと身上伺」「同日、増野

正兵衛身上障り伺」

- ・4月16日(陰暦3月23日)「増野正兵衛身上障り伺」「家業休み家貸し、家賃を以て暮らす伺」「元町道幅広める願」「家売り田地求める伺」
- ・4月20日(陰暦3月27日)「増野正兵衛神戸へ帰る伺」
- ・4月24日午後5時半「増野正兵衛身の障り伺」
- ・5月10日「増野いと裏向き通じ悪しきに付伺」
- ・5月12日(陰暦4月20日)「増野正兵衛足だるみ胸痛むに付居所の伺」
- ・5月13日(陰暦4月21日)「増野正兵衛耳鳴るに付伺」
- ・5月14日(陰暦4月22日)午前9時「真之亮立合いにて、増野正兵衛身上障り伺」

まず、3月27日の「おさしづ」の割書では「身の障り」とだけあるが、お言葉の冒頭で「さあへ身の障り、さあ声出難い」とあり、声(口・咽喉)に関わる身上だったことがわかる。そして、ここでは、そうした身上に対して「人救ける、救けにや日々切のうて話出来ぬ」というお言葉があり、人がたすかるような話し方や言葉遣いを促されていることが拝察される。また、「前々話、末代一所寄せ、あちらへもこちらへも障り付く」といったお言葉が見られ、身の障りを通して増野正兵衛を含めたさまざまな人を引き寄せようとしていることが読み取れる。

そして、少し変則的ではあるが、増野正兵衛には同日の「おさしづ」がもう一件ある。日付の表記は「明治二十年三月二十八日(陰暦三月三四日)頃」とあり、おおよそこの頃に頂いたものとされる。そこには「楽しみ無くばならん。これこそ先ず生涯、楽しみ一日、早く渡したい」という言葉が見られ、おさづけの理について示唆されていると解される。

それから、10日くらい経った4月6日、今度は夫婦でそれぞれの身上に関して伺っている。ここではそれぞれに「誠を内々へ伝え」や、「内々一つ談示、心一つ又々思案しても居る」などのお言葉があり、内々を治めることが伝えられている。

それからさらに10日後の4月16日にも、正兵衛は自身の身上に関して伺っており、やはり、「身の処思案、内なる処一時案じて居る。一つ話談じやい」と、内々の談じ合いについて説かれたお言葉が登場している。

さらにこの日の「おさしづ」では、自身の身上に加えて、家業や郷里・元町の道幅を広めることについても伺っており、『事情さとし』(深谷忠政編)を参照すると、まず、家業に関しては、「時節によって暮らし向きの変わるのは親神のなさること、よく話し合せてせよ」と述べられており、また、「家売り田地求める伺」に対する「おさしづ」では、「ぢばの処、事情どうでもこうでも、決心が難しい」が、「今事情一つ思やん踏み止めに内々事情運べ」と内々でしっかり話し合っておぢばに移り住むようにと促されていることが分かる。⁽¹⁾

こうしたことから、正兵衛にはおぢばで勤めることが求められていると考えられるが、続く4月20日の「おさしづ」に「天然自然脈やかなの所が淋しくなる、淋しき所が賑やかなる、というは天然自然なる」というお言葉があることから、増野家の中で神戸という繁華なところから大和の田舎に移り住むことに対する躊躇があったのではないかと推察される。こうした点に関して、内々でしっかり話し合せて心をそろえるようにと促されているのであろう。

[註]

(1) 深谷忠政編『事情さとし』(天理教道友社、1974年)、16頁。